

この授業は，ピアノの演奏技術と表現力を高めるためには不可欠の近現代作品を取りあげ，表情豊かな演奏が出来るようになることを目的としている。

受講生は3回生5名である。受講生全員ピアノ①～④を受講済みである。前学期ピアノ④においては近現代のピアノ練習曲を中心に授業を受けている。

授業で取りあげた作品は以下の通りである。

ラヴェル作曲 道化師の朝の歌

ドビュッシー作曲 喜びの島
 グラドゥス・アド・パルナッスム博士
 映像第1集
 ピアノのために
 アラベスク第1番

スクリャービン作曲 ソナタ第2番

フォーレ作曲 無言歌

更に関連する作品として，受講生の希望により以下の作品を取りあげた。

ショパン作曲 舟歌
 練習曲
 バラード第1番
 華麗なる変奏曲

ベートーヴェン作曲 ソナタ第14番

それぞれの曲は受講生と話し合い，意欲的に研究が進むように，出来る限り希望に添うようにした。

受講生は5名であるが，手の大きさに，かなりの差がある。広く（10度）手が広がる者2名，平均的な大きさの者2名，1オクターヴが困難な者1名である。それぞれの大きさに合わせた奏法を工夫する必要がある。第1に必要なことは，各自の手の大きさと機能を把握することである。

第2には無理をしてはならないということを実感することである。受講生のほとんどは，無理をして演奏することに慣れており，自覚をしていない者が多い。無理をする（極度に指を伸ばし、腕を緊張させる）奏法では，安定した音色作りが困難になる。

近現代作品は，特に多彩な音色が必要とされるため，タッチやペダリングに関する繊細な感覚と音色のブレンドに対応する技術の習得が不可欠である。フォーレ，ドビュッシー，ラヴェルの演奏を取りあげることにより，具体的なタッチやペダリングを学んだ成果は大きいと思われる。

運指はピアノの奏法の基礎となるものである。手の大きさに対応した運指は，パッセージのポジション分けから行う必要があるため，譜読み時の指使い決めの際には細心の注意を払った。ペダル使用の目的を明らかにして，無駄で無意味な使用を避け，必要十分なペダリングを選択し，合理的な使い方を検討した。ドビュッシーの作品には，作曲者の意向で，指使い番号とペダルの使用が楽譜に書かれていない。そのため，教材に取りあげることが，非常に有意義であると思われる。受講生各自の手指のサイズ・技術に最も相応しい指使いとペダリングを考えざるを得ないためである。

ポジションの移動という捉え方は，ほとんどの受講生にとっては，大学入学時までに経験のない方法なため，無理な奏法を重ねる癖から解放されていない受講生が多い。頑張ること・無理をすることの両方はピアノを演奏することの妨げにしかならないということを受講生は段々と理解して来ているように思われる。

次年度は，全員卒業研究でピアノ演奏を選択している。演奏曲目の決定に際しては，受講生本人の希望と音楽性・技術の達成度に合わせた検討が必要になる。

ピアノ⑤授業の終了に際して，アンケート調査を行った。質問事項は主に3項目で

ある。

先ず第1に、この授業で得た成果について質問した。

技術的な面では、

- ・指使いや体の動かし方、自分に合ったやり方を学んだ。
- ・体の楽な使い方、体と音楽の関連、速い曲を演奏するときの指の使い方を学んだ。
- ・演奏困難なを克服する具体的な方法。

音楽的な面では、

- ・イメージを具体化すること。
- ・音楽の流れ、拍子感、楽譜に書かれた表現、作曲者の違いによる音色の変化を学んだ。

第2に、授業に対する取り組み方について質問した。

取りあげた曲の分量について、

- ・適量。
- ・もっといろんな曲に取り組めば良かった。

グループレッスンについて

- ・とても勉強になる。
- ・自分以外の曲についても勉強になる。

第3に、改善点について質問した。

- ・レッスン時のピアノがあまり良くない。
- ・ブリュートナーが弾きにくい。
- ・ブリュートナーを使えて良い。
- ・もっと、細かく指導してほしい

以上がアンケートの結果である。

次年度に向けて改善しようと考えているのは、スペイン（ラテン）系、東欧系の曲を取りあげる受講生が今年度はいなかったもので、是非次年度は取りあげるように指導したい。細かな指導に関しては、出来る限り自分で考え、創造する演奏を目指すために、極力細かに指導する面と、自主性に任せる面の説明を行い、誤解が生じないように、授業を進めて行きたいと考えている。